

第1章

構想の 策定経緯と 位置付け



人口十五六万の、街並が山腹に階段形に這い上った港街で、
広大な北海道の奥地から集まつてきた物産が、

そこから又内地へ出て行く

謂わば北海道の『心臓』みたいな都会である。

(中略)

時代的などんな波の一つも、この街全体が
恰かも一つの大きなリトマス試験紙でもあるかのように、
何等かの反応を示さずに素通りするということはない。

——小林多喜二「故郷の顔」



第1章 構想の策定経緯と位置付け

1. 構想策定の背景と目的

小樽市は、人口117,137人（平成30（2018）年8月31日現在）、平成27（2015）年10月1日現在の国勢調査人口では、全国791市中291位に位置する中都市である。

一方で、観光入込客数は平成29（2017）年度に年間800万人を超えており、国内でも有数の観光都市として知られている。特に近年では、アジア圏からの外国人観光客が多く訪れており、宿泊客数による統計では、東アジア圏の中国、韓国のみに限らず、シンガポール、マレーシアなど東南アジア圏からの観光客数も増加傾向にある。

こうした観光客をはじめとする多くの人々が、小樽と聞いてイメージするのは、小樽運河と石造倉庫群に代表される歴史的なまちなみであろう。



観光客でにぎわう小樽運河（眞柄利香提供）

図表1 北海道と小樽の位置



図表2 道内の主要都市と小樽



当市の歴史的なまちなみは、主に明治時代以降に建築された建物によって構成されている。当時の小樽は、北海道の玄関口として、また日本の近代化を支えたエネルギー源であった石炭の積み出し港として、全国的にも特に重要な都市として位置付けられていた。したがって、この頃建設されたさまざまな建造物の中には、その当時の好景気を象徴するものが多く残されている。



天狗山からの展望

当市が観光都市として成長するにつれ、市内には多くの観光スポットが誕生した。こうしたエリアには市民の生活に近い自然や景観が存在する。例えば、夜景やロープウェイが人気の天狗山や、赤岩山や下赤岩山の姿は、市民にとっては生活の中で日々目にする景観の一部であり、散策や山菜取りなどで足を運ぶ機会も多いことから、市民の暮らしに密着した観光スポットであるとも言える。

小樽市は、明治時代に集団移住が行われた道内の他地域と異なり、幕末から明治にかけて道南並びに本州以南各地からの移住者が多数住みつき、急速にまちが形成されていった。そのため、全国各地から多様な生活習慣や民俗芸能が持ち込まれてきたという歴史がある。

このように歴史的景観と自然環境に加え、多様な暮らしの背景を持つ文化遺産が多く残されていることが、当市の特徴と言える。

しかし、これら小樽を形成してきた文化財は、現在危機的な状況を迎えつつある。建築後100年を経過した建物は、老朽化が進み維持が困難となっている。また、産業構造等の変化により多くの建物が建設当時とは別の用途として活用されているものの、大規模改修若しくは改修困難な状況から解体の選択を迫られている。民俗芸能や祭礼についても、市内で顕著な少子高齢化の影響による後継者不足が浮き彫りとなり、今後の維持が困難とされるものが多い。さらに、家庭や地域で担ってきた伝統的な文化の継承は難しい状況であり、既に消滅したものもある。

このようなことから、近年、小樽市に限らず少子高齢化などを背景とした、文化財の減失や散逸等の加速化への対応が喫緊の課題となっている。

これらの実情を抱えながらも、当市は歴史的建造物を再利用したまちづくりにおいて、全国でも先駆的な取組を行ってきた。

後述するいわゆる「運河保存運動」をきっかけに、昭和58(1983)年に「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」が制定されると、同時進行で多くの民間企業やボランティアなどの各種団体がそれぞれの立場で保存、管理、活用を図ってきている。

一方で、文化財そのものの価値が一過性で消費されるような活用が、往々にして見受けられる。文化財についての歴史的価値などが見失われ、単純なイメージだけが供給される手法が蔓延するといった背景も根強くある中、文化財の保存、管理、活用の望ましい姿を構築するには、専門的な見地に加え、さまざまな立場からの意見を検討し、地域社会全体で連携を強めその継承に取り組んでいくことが必要である。

ここで改めて考えたいのは、何のために文化財を活用するのか、ということである。

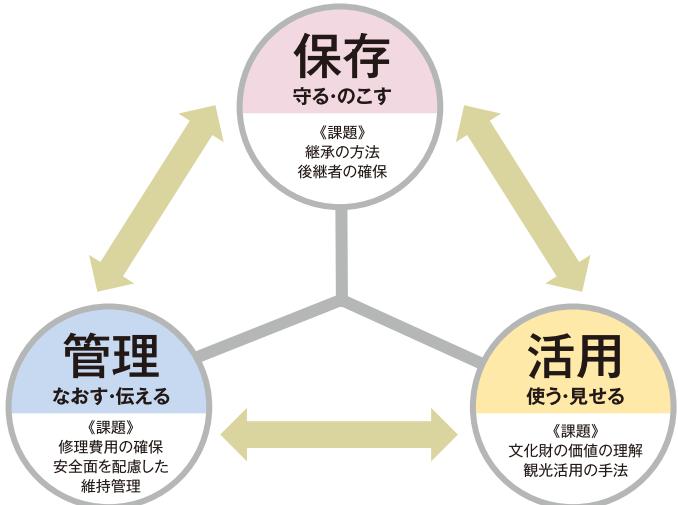
文化財保護を取り巻く環境は、さまざまな社会情勢の変化などにより厳しさを増している昨今、未指定を含めた文化財をまちづくりに生かしつつ、文化財を「みんなのもの」として「残すために見せる」活動が本来の文化財活用であることを、今一度心にとどめるべきであろう。

小樽市歴史文化基本構想(以下、本構想)では、市内各地に残されてきた自然を含む文化遺産を調査確認し、我がまちの持つ多様かつ豊かな文化遺産の持つ意義の周知に努める。その結果市民一人ひとりが、多様で特色ある歴史と多くの文化遺産に囲まれて生活しているという誇りと心地よさを持ちながら暮らすことが実現し、我がまちに対する誇りと愛着が醸成されることとなる。

そうした市民意識の成熟は、市民の暮らしの内面的な充足につながるであろう。そして、このことがやがて道内外に向けた小樽の魅力の発信につながるものと期待される。

本構想は、小樽市の多様な文化遺産を基盤としたまちづくりや人材育成に重要な役割を果たし、市民とともに「小樽文化遺産」の保存活用に取り組むためのマスタープランとして策定する。

図表3 文化財の保存・管理・活用



小樽文化遺産とは、地域を構成する多様で価値が高いと考えられる文化財(指定、未指定を含む)のみならず、その周辺環境との関係のもとに形成されるさまざまな価値を総合的に組み入れながら、市民が暮らしの中で大切に受け継いできた歴史的、文化的、自然的遺産を含むものとし、それらを本構想において「小樽文化遺産」と定義する。

2.策定に至る経過と調査方法

本構想は平成28(2016)年4月から策定作業を開始した。その中核として各分野の有識者による「小樽市歴史文化基本構想策定委員会(以下、委員会)」を図表4の委員構成で発足した。さらに、市内各所に潜在する小樽文化遺産をできる限り詳細に拾い上げるため、地域史の研究者を中心とした「小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会(以下、調査部会)」を下部組織として設置した。調査部会の委員構成は、図表5のとおりである。

小樽市は、明治期以来全国屈指の港湾都市、経済都市となつたため、多くの調査報告がなされている。また、「運河保存運動」を契機に、各大学、研究機関による文化財調査、社会学調査などが多数実施されている。調査部会ではこれらの調査データの収集分析を行った。

また、教育委員会、博物館などによる調査も半世紀以上の蓄積があり、これらも貴重なデータとなった。調査部会各委員による調査も多方面にわたって2年間実施された。策定に至るまでの委員会、調査部会の活動概況は図表6に示す。

一方で、広く文化遺産の所在を知るために、シンポジウム、ワークショップを開催し、市民から小樽文化遺産の情報収集を図るとともに、本構想策定の意義についても広くアピールしていった。また、平成29(2017)年末には、広報おたるにおいて正月を中心とした食習慣や儀礼についてのアンケートを、市民を対象として行った。

図表4 小樽市歴史文化基本構想策定委員会 委員名簿

(一部の委員を除き、任期は平成28年9月から平成31年3月まで)

氏名	分野	所属等
学識経験者		
臼杵 真	考古学	札幌学院大学教授/北海道考古学会会長/ 北海道文化財保護審議会会長/日本学術会議連携会員
大原 昌宏	自然史	北海道大学総合博物館教授・副館長/北海道文化財保護審議会委員/ 日本昆虫学会評議員/北海道希少野生動植物指定候補検討委員会委員
荻野 富士夫 (平成30年3月まで)	近代史	小樽商科大学特任教授/小樽市文化財審議会副会長/ 市立小樽文学館協議会委員
川上 淳 (委員長)	近世史	札幌大学教授/北海道埋蔵文化財センター評議員/ 北海道歴史文化財団評議員
駒木 定正	建築史	北海道職業能力開発大学校建築科特別顧問/ 小樽市文化財審議会会长/北海道文化財保護審議会委員/ 小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観審議会会长
西條 文雪	観光関係者	小樽観光協会会长/小樽観光大学校運営委員長/ 小樽絵本・児童文学研究センター理事
東田 秀美	まちづくり	NPO法人小熊邸俱楽部理事長/中標津町景観審議会委員/ 北海道立市民活動促進センターNPO相談員
舟山 直治	民俗学	北海道博物館学芸部長/松前神楽調査委員/ 江差町歴史文化基本構想策定委員/文化庁調査員(文化財部伝統文化課)
本間 恵美	建築史	北海道建築士会常務理事/北海道建築士会地域貢献活動センター委員長/ 日本建築士会連合会女性委員会副委員長
山本 秀明	商工関係者	小樽商工会議所会頭/北海道商工会議所連合会副会頭/ 小樽市文化財審議会委員
吉岡 宏高	産業史	札幌国際大学教授/NPO法人炭鉱の記憶推進事業団理事長
行政関係者		
相庭 孝昭		小樽市建設部長(平成29年3月まで)
上石 明		小樽市建設部長(平成29年4月より)
飯田 敬		小樽市教育委員会教育部長(平成29年4月より)
加賀 英幸		小樽市産業港湾部長(平成30年4月より)
工藤 裕司		小樽市教育委員会教育部長(平成29年3月まで)
中野 弘章		小樽市産業港湾部長(平成30年3月まで)

オブザーバー

氏名	所属等
浅野 祐司	北海道教育庁文化財・博物館課(平成29年度より)
岡本 公秀	文化庁地域文化創生本部事務局 広域文化観光・まちづくりグループ 文化財調査官(平成29年度より)
下間 久美子	文化庁文化財部 参事官(建造物担当)付文化財調査官(平成28年度)
玉川 法之	北海道教育庁文化財・博物館課(平成28年度)

図表5 小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 調査部会員名簿

(任期は平成28年11月から平成30年3月まで:※は策定委員と兼務)

氏 名	担当分野	所 属
石塚 則子	書 誌	市立小樽図書館 司書(副館長)
荻野 富士夫※	近代史	小樽商科大学 特任教授
駒木 定正※	建築史	北海道職業能力開発大学校 特別顧問
今 尚之	土木史	北海道教育大学札幌校 准教授
菅原 慶郎	近世史	小樽市総合博物館 学芸員
高野 宏康 (部会長)	近代史	小樽商科大学グローカル戦略推進センター 学術研究員
馬場 博人	文化財	小樽市総合博物館ボランティア
星田 七重	美術史	市立小樽美術館 学芸員(主幹)
山田 真理子	近代史	小樽市総合博物館 学芸員
山本 亜生	自然史	小樽市総合博物館 学芸員(主査)

図表6 小樽市歴史文化基本構想策定に至るまでの流れ

平成28(2016)年度		
平成28年	4月 1日	小樽市歴史文化基本構想 策定開始
	9月 3日	平成28年度第1回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催
	11月 9日	平成28年度第1回小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 開催
	12月 22日	平成28年度第1回小樽市歴史文化基本構想庁内検討会議 開催
平成29年	1月 19日	平成28年度第2回小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 開催
	1月 28日	シンポジウム「文化遺産を活かしたまちづくりシンポジウム～「歴史文化基本構想」から「日本遺産」を目指して」 開催
	2月 11日	平成28年度第1回ワークショップ 「市民の手で守る、育てる文化財・歴史文化基本構想策定へ向けて!」 開催
	3月 11日	平成28年度第2回ワークショップ 「文化財群」という視点-歴史文化基本構想策定へ向けて!」 開催
	3月 21日	平成28年度第2回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催

平成29(2017)年度		
平成29年	7月 7日	平成29年度第1回小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 開催
	8月 19日	シンポジウム「小樽シンポジウム『日本遺産』の策定に向けて」 開催
	9月 27日	平成29年度第2回小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 開催
	11月 2日	平成29年度第1回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催
	12月 16日	平成29年度第1回ワークショップ「教えて! 忍路・蘭島の食文化・風習」 開催
	12月 22日	平成29年度第3回小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 開催
平成30年	1月 27日	平成29年度第2回ワークショップ 「話そう! 残そう! 伝えよう! 張碓・春香の食文化・風習」 開催
	2月 28日	平成29年度第4回小樽市歴史文化基本構想策定委員会調査部会 開催
	3月 20日	平成29年度第2回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催 調査部会より報告

※平成29年度をもって調査部会が解散

平成30(2018)年度		
平成30年	5月 21日	平成30年度第1回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催
	7月 5日	平成30年度第2回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催
	8月 8日	平成30年度第1回小樽市歴史文化基本構想庁内検討会議 開催
	8月 20日	平成30年度第2回小樽市歴史文化基本構想庁内検討会議 開催
	8月 20日	平成30年度第3回小樽市歴史文化基本構想策定委員会 開催
	9月 28日	平成30年度第1回小樽市文化芸術審議会 開催
	11月 5日	パブリックコメントの実施(12月4日まで)
	12月 12日	平成30年度第2回小樽市文化芸術審議会 開催
平成31年	3月 2日	文化遺産フォーラム 「文化遺産といきるまち 歴史文化基本構想をどう活かしていくのか」 開催

3.本構想と小樽市の上位計画及び関連計画との関係

「目的」の項で述べたように、本構想は、「小樽文化遺産」の保存活用に取り組むため、将来を見据えた「文化財保護の長期的マスター・プラン」となるものであり、小樽市の多様な文化遺産を基盤としたまちづくりや人材育成に重要な役割を果たすものと位置付けることができる。

本構想を具現化していくためには、自然環境や都市景観の保全、観光振興などのほか、文化財等の防災や耐震化対策を考慮するなど、各分野の事業や施策との連携を図る必要がある。

この連携を実効性のあるものとするためには、小樽市の最上位計画である小樽市総合計画や関連計画における各部局のあらゆる事業や施策について地域の歴史や文化の特性が反映されるよう、本構想による強い働きかけが必要であり、これにより小樽文化遺産を基盤としたまちづくりや人材育成のより一層の推進を目指していく。

図表7-1



図表7-2

